商牌雜集

三

30
104
別圖
3-7
2-1

国立国会図書館　タイトル『商牌雑集』　請求記号　寄別3-7-2-1

ガラス使用

其焼砂揚す
他塩糖物し

大正 5. 2. 21 購求

精製瓢鮓

御出まへまハ山本山煎茶一ト云瓶とりそへさし上ハ

伏禀

蔓ひとはだれこころよまと千代がものせし瓢鮓の主人ハ。猫かよひけり揚屋町と晋子が吟ぜし京町の辺に見世を開く庇顧を蒙り。百生の數ハものうハ花主の千余に及ぶハ當時いづもの鮓鄽も。御客の尊意に的ゆうにと念を入ゆゑにやうらん。什麼近世の雜餚時花なる。鶉を調じてく五もくと唱鯛乃首尾全を柏漬と称など。種々に壓様々に漬まハ水仙巻の種と欤きて。針魚の鱗微細にハ尽し難し。されバ魚鳥のうへにも限ず。古くよりはうふ海苔鷄卵さへいまハなりく其侭ハ用ず。蛋清を去て旨を添る。蛋黄鮓の妓樓爺。庄司某が元吉原を開發。篠巻苔脯の色にも思ふ黒手組の助六が。廓中へ立入時代にハ見聞もおよびぬ珎製佳品。海老ハ上鈍切を最上とし。鱓ハ濱川下を至極と撰ミ。鮓種変化する中に。獨鱅のミ鮓桶の鍮石筏箍とともに脊を光せ。器の内に堆く坐さるハ穂蓼も生る八丁堤に土手節唄とまん坊が。編笠漬の羅簦借て大門を入し昔より。今にかはらぬものとやいふべき。斯迄魚鮓のかこなハるれバ。

同家業夥く、五町の内店大路鬻鮨を漬こゆうざといふ常
言に似て一面にあれどもいづれも多分の賣嵩は是
太平の御恩澤、年培日増に花街の繁榮、四序流行の仲之町、
昨日は軒端に見し櫻も、今日は下ゆく遣水に殖ゑしたる花溪
蓀、蜘手にかけし八架に等く、彼方からも此方からも、巴屋の鮓
榮藏の品と不断御用向を偏に希上奉ると日頃は筆頭に
著寓言も、頼まましたる御披露ばかりはそれとかはりて
本町庵故人三馬が口調に倣て

今戸の戯作者
柳下亭種員述

○鶉ゆりく漬○鷄卵蛋黄漬○玉子編笠漬
○鯛柏漬○姜公魚水仙巻○海苔篠巻
○小吉田漬

右之外は諸法好次第御進物
御重詰御折詰会入作料等是上は

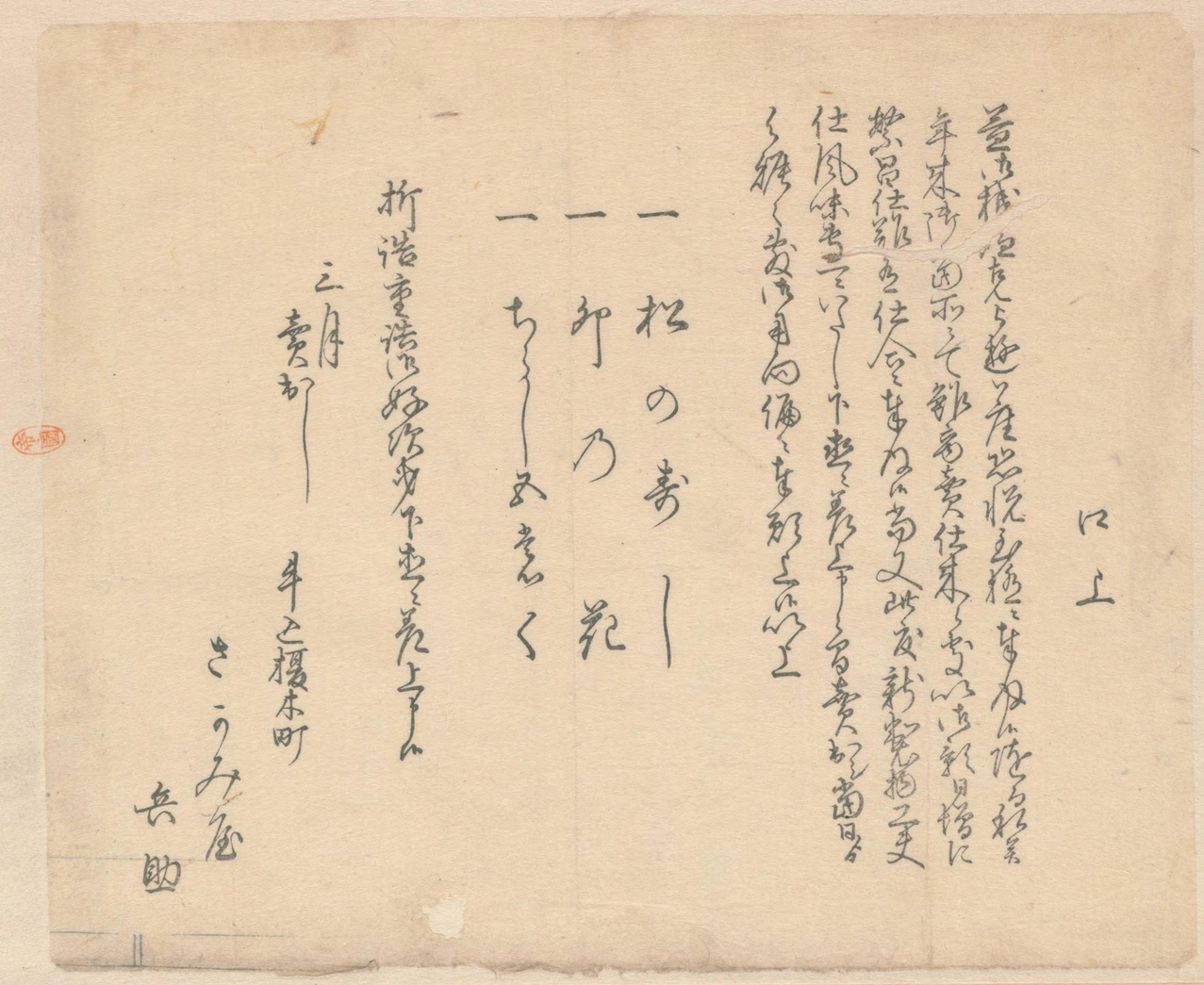
六月五日賣出し
當日廉家若上は
新吉原京町壹丁目東側
巴屋榮藏

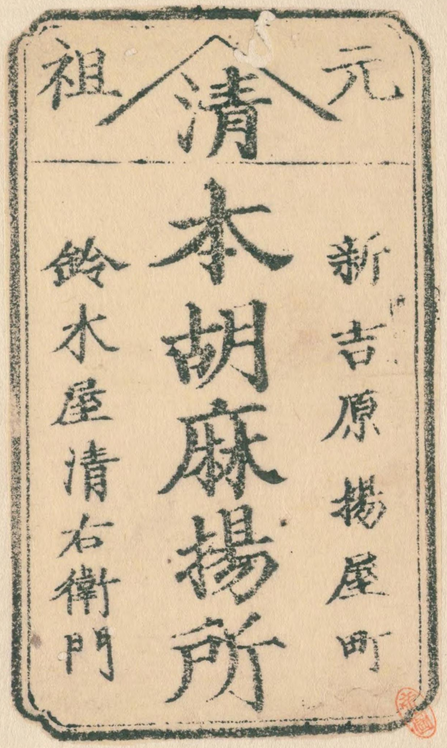
口上

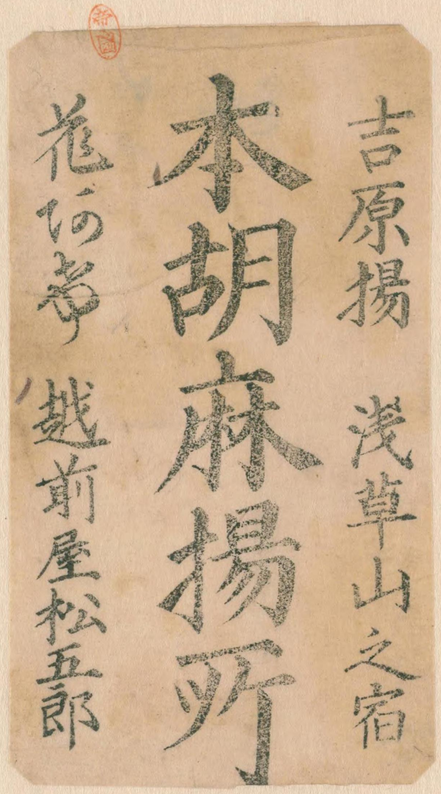
並に様に御見ち趣に屋恐悦を稱へ奉る程に
年末陰 固而て銀高賣仕来ら事ゆへ御新日増に
繁昌仕銀を仕合を事ゆへ尚又此度新発揚二更
仕風味等ニいたし下ゆへ差上ゆへ旨賣ゆへ當日分
ゆへ雅く愛御用向偏を願上ゆへ

一 松の寄し
一 卯乃花
一 ちらし又喜く

折詰重詰御好次第下ゆへ差上ゆへ
三月
賣ゆへ
牛込榎木町
さこうみ屋
兵助

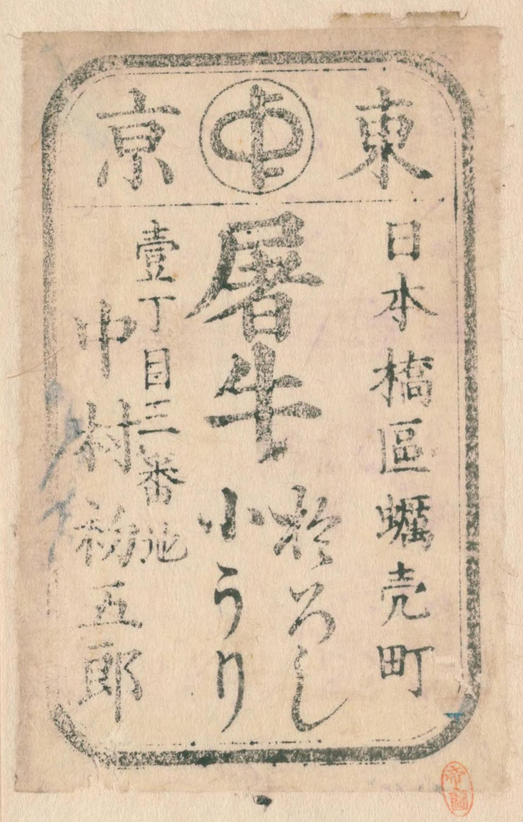


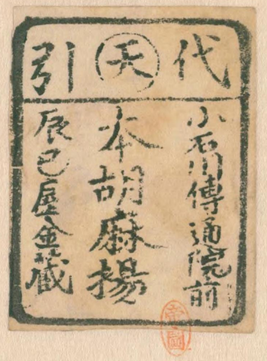




国立国会図書館　タイトル『商牌雑集』　請求記号 寄別3-7-2-1

ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『商牌雑集』　請求記号 寄別3-7-2-1
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『商牌雑集』　請求記号　寄別3-7-2-1

ガラス使用

砂糖類大安賣

御小賣

差上申候

氷砂糖　出嶋白砂糖

三盆白砂糖　太白砂糖

雪白砂糖　黄色の砂糖

阿人くち砂糖

金米糖類　但し箱入にして

御進物向調進

砂糖漬物類　珍物取ニ口共

清進物ニ箱入にして差上申候

署家ニ御見舞郡向

御進物重寶之取ニ口ニ産ス

箱入面和袋入御好次第調進仕

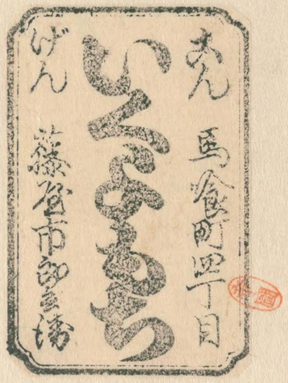
格別大下直ニ奉差上候間

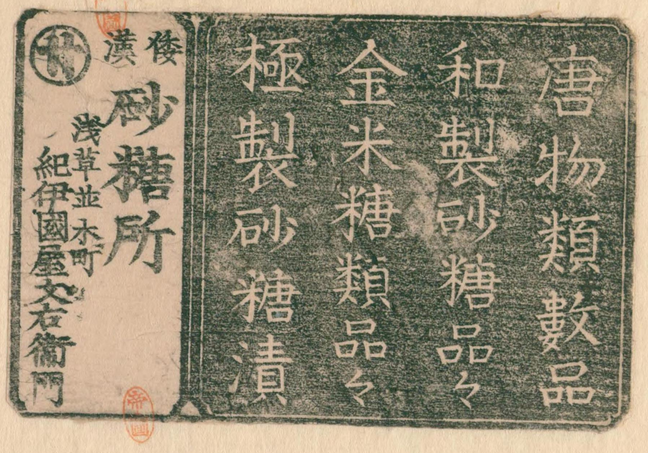
不相替御用向奉御願申上候

サ

京都二条通室町西入南側

桝屋佗　玄清　出店

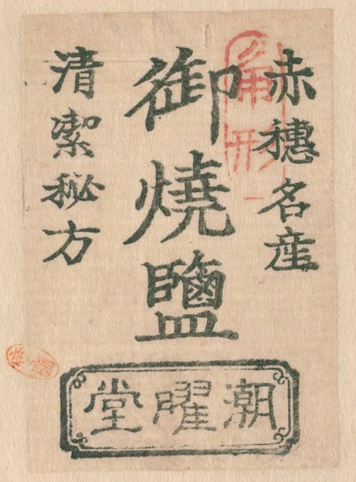


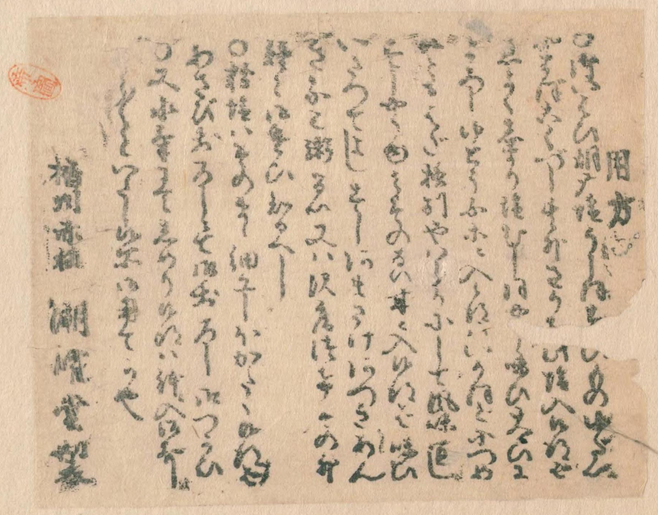


国立国会図書館　タイトル『商牌雑集』　請求記号 寄別3-7-2-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『商牌雑集』 請求記号 寄別3-7-2-1

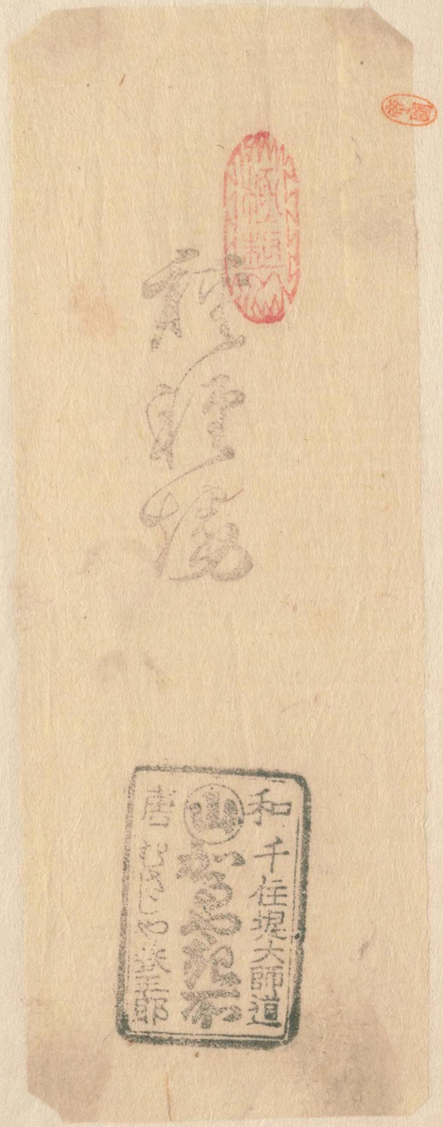
ガラス使用

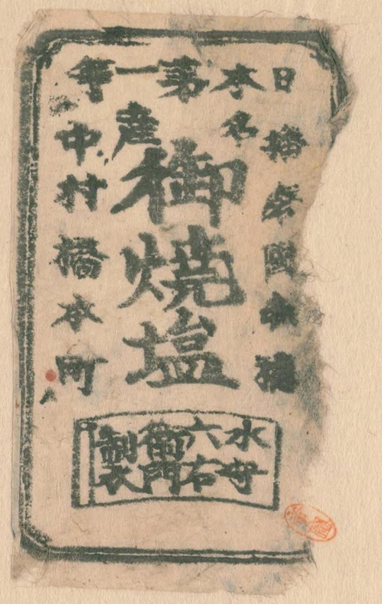




国立国会図書館　タイトル『商牌雑集』 請求記号 寄別3-7-2-1

ガラス使用



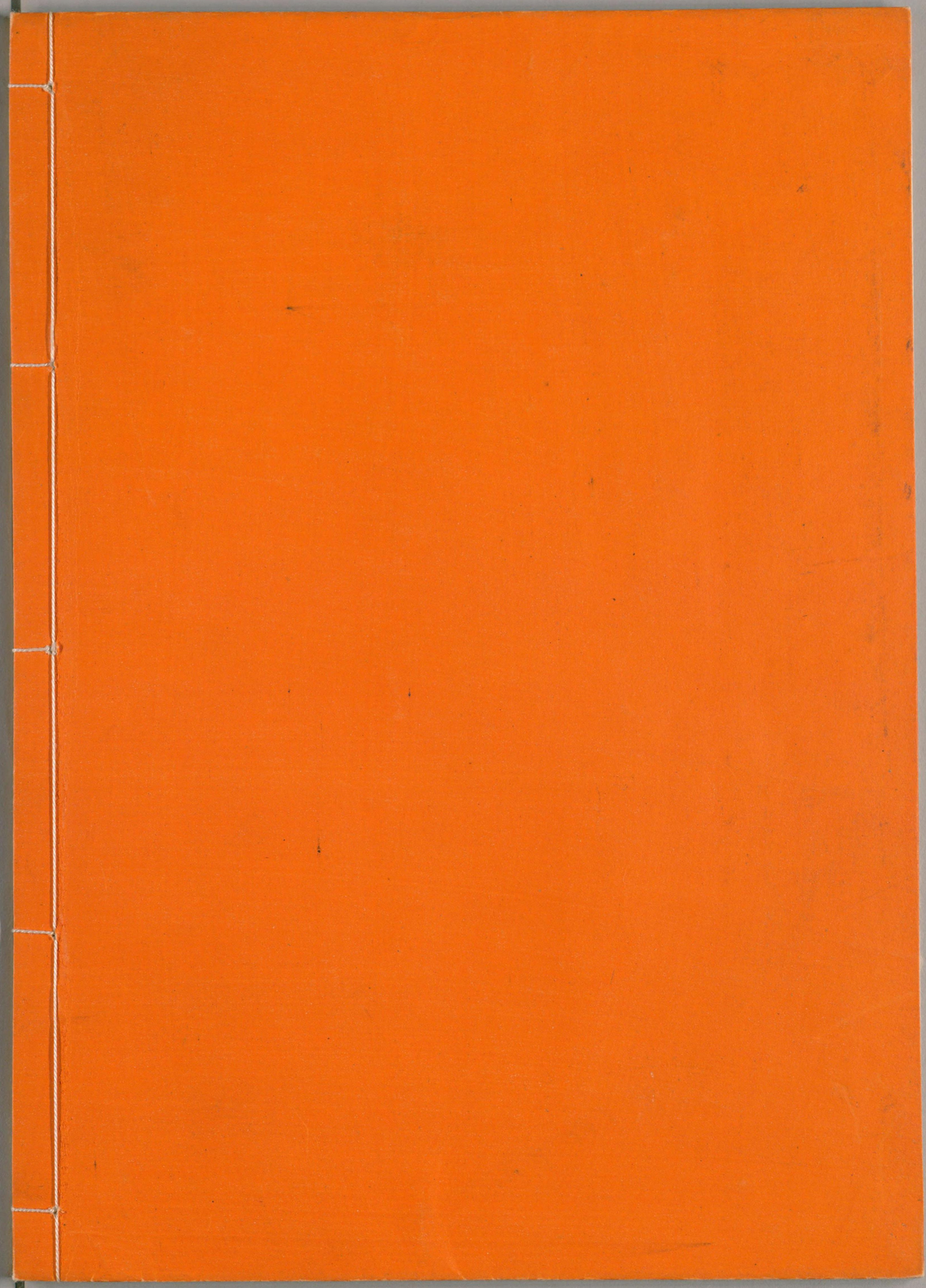


国立国会図書館　タイトル『商牌雑集』　請求記号 寄別3-7-2-1
ガラス使用

せ
30
104

国立国会図書館　　タイトル『商牌雑集』　請求記号　寄別3-7-2-1

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『商牌雑集』　請求記号　寄別3-7-2-1

ガラス使用